

自閉症スペクトラムのある中学2年の生徒に対して、感情のコントロール等の合理的配慮を行った事例

1. 事例の概要

A生徒は、B中学校の自閉症・情緒学級に在籍する自閉症スペクトラムのある中学2年である。A生徒の興味がある教科については、熱心に質問をする様子が見られる。一方で、抽象的な内容や、A生徒にとって価値がないと思える教科には全く興味を示さない。自分の納得できない状況になると、パニックになり授業中でも教室を飛び出すこともある。また、予定の変更に弱く、突発的な時間割の変更等があると対応できず、授業に入れないこともある。気持ちが昂ぶると大きな声で叫ぶため、気持ちの切り替えやコントロールが課題の一つでもある。

B中学校では、A生徒の課題について、担任と保護者が相談して支援を進め、A生徒に対して、見通しの持たせ方、感情コントロール、注意集中、こだわり、対人コミュニケーション等の観点から合理的配慮を提供してきた。

これらの合理的配慮の提供の結果、A生徒は、教室移動に対応できるようになり、気持ちが崩れても、次の学習を考えてクールダウンする時間が短くなった。また、ふり返りの時間を継続したことで少しずつ自分の姿を客観的に捉えられるようになってきている。

キーワード こだわり、パニック、感情のコントロール、見通し、人との関わり、気持ち及び場面の切り替え

2. 児童の実態

A生徒は、B中学校の自閉症・情緒学級に在籍する自閉症スペクトラムのある中学2年である。座って話を聞くことが苦手で、集会に参加することが難しい。数学や理科等には興味があるため、熱心に質問をする様子が見られる。一方で抽象的な内容や、A生徒にとって価値がないと思える教科には全く興味を示さない。自分の納得できない状況になると、パニックになり授業中でも教室を飛び出すこともある。コミュニケーションが苦手で、自分が思ったことを他の生徒にストレートに伝えてしまい誤解を生むこともある。また、他の生徒の言葉を自分なりに解釈して、怒りを露わにすることがある。また、予定の変更に弱く、突発的な時間割の変更等があると対応できず、授業に入れないこともある。気持ちが昂ぶると大きな声で叫ぶため、気持ちの切り替えやコントロールが課題の一つでもある。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 全教職員の共通理解と協力体制のもと、発達の状況を的確に把握し、個に応じた教育内容、指導方法の工夫と改善に努めている。【基礎2】
- B中学校のあるC市の「個別の指導計画に関する要綱」に則り、A生徒に対しても個別の指導計画を作成している。就学前から小学校へ、小学校から中学校へと確実に引継ぎがなされている。【基礎3】

- 学習課題を視覚で捉えることができるよう、マグネットや写真等を利用して、グループの話合いの結果を掲示したり、前の授業のまとめを、次の授業で振り返ることができるように提示したりしている。また、毎時間の学習のめあてが確認できるように全教室の黒板に、ラミネートされた「今日の目標」の掲示物を準備している。
【基礎4】

4. 合意形成のプロセス

B中学校では、A生徒が入学してから、落ち着きのなさ、極端な偏食、嫌と感じると課題に取り組めない等のA生徒の課題に寄り添いながら、担任と保護者が相談して支援を進めてきた。保護者からは、A生徒への合理的配慮の提供がA生徒に負荷がかかるのではなく、A生徒が快適に過ごしやすいようになるための取組であるということによって理解が得られ、合意に至った。

5. 合理的配慮の実践

- A生徒に対して、学習のめあてや学習内容等を板書する等して事前に示し、時間のメリハリを付けて学習を促したことにより、学習のめあてに沿って学習ができた。
【合理①-1-1】
- 「国語」で、長文音読に取り組む際には、A生徒の特性をふまえて言動を予測しながら量を減らしたり、読み方を工夫したりする等の代案を提示し、やりとりしながら自己決定させ、音読に取り組ませている。【合理①-1-1】
- 校外学習のグループ編成の際、普段からA生徒と関わりのある生徒を数人配置しコミュニケーションを取りやすくしたことにより、A生徒は楽しく校外学習に参加することができた。【合理①-2-1】
- A生徒は遊び（細かな文字を書く等）ながら、心の安定を図っているところがあるので、許容範囲である遊びであればそれを認め、仕草や発話等を観察しながら、傾合いを見計らって感情を切り替えるよう促している。【合理①-2-3】

6. 本事例の成果と課題

A生徒に対して、見通しの持たせ方、感情コントロール、注意集中、こだわり、対人コミュニケーション等の観点から合理的配慮を提供してきた。その結果、A生徒は教室移動に対応できるようになり、気持ちが崩れても、次の学習を考えてクールダウンが短くなった。また、振り返りの時間を継続したことで少しずつ自分の姿を客観的に捉えられるようになってきている。しかし、対人コミュニケーションの課題への対応は継続して行う必要がある。特に、集団への適応という観点では、A生徒は今後も様々な困難が予想される。自立していく上で欠かせない性に関する指導や、自分の行動等をモニタリングする等は、今後も特別支援学校のセンター的機能や巡回相談等を活用し、指導や支援を行う予定である。